



## 第2回 神戸・元町アイドルレディー レディースもとまちコンテスト



水谷すみれさん

杉岡 牧さん

三村 直美さん

元町の各種 P R 行事に花を添える『もとまちアイドルレディー』の最終審査が 5月9日、風月堂5Fホールで行われた。元町地区PR委員会(山端一夫会長)が昨年から始めた企画で、阪神間の25才までの未婚女性を対象に公募し、今回は260名が応募、書類選考の上10名が最終審査に残った。この日は、商店街や百貨店の代表など10名の審査員を前に、面接、歩き方など家事手伝い水谷すみれさん(21)、芦屋市在住甲南大生杉岡牧さん(21)、宝塚市在住芦屋大生三村直美さん(20)の3人がアイドルレディに決まり、ハワイ旅行などの賞品を手にして「と行ってもうれしい」と大喜び。なお、この3人は元町の公式行事に一年間活躍する。公

元町の各種 P R 行事に花を添える『もとまちアイドルレディー』の最終審査が 5月9日、風月堂5Fホールで行われた。元町地区PR委員会(山端一夫会長)が昨年から始めた企画で、阪神間の25才までの未婚女性を対象に公募し、今回は260名が応募、書類選考の上10名が最終審査に残った。この日は、商店街や百貨店の代表など10名の審査員を前に、面接、歩き方など家事手伝い水谷すみれさん(21)、芦屋市在住甲南大生杉岡牧さん(21)、宝塚市在住芦屋大生三村直美さん(20)の3人がアイドルレディに決まり、ハワイ旅行などの賞品を手にして「と行ってもうれしい」と大喜び。なお、この3人は元町の公

### 新製品コーナー



### クリンツイ

ゴンチャロフ特製のフレッシュバターをたっぷり使って焼き上げました。パリッと香ばしく、まろやかな味わいです。四季を通してのご進物に、パーティにティータイムにご愛用下さい。

¥500(12枚入)～¥3,000(72枚入)

★ウネの新店長さん登場  
畠 吉信さん 31才



甲南大学経済学部卒業後、安宅産業へ入社、5年勤めた後ウネに入り現在に至る。愛妻家の評判が高くやよい夫人との間には6才を頭に4才、1才となんと3児の父。スキーとジョギングが趣味で、全国を東奔西走の忙しい毎日だが家族とのコミュニケーションを大切にしている。抱負をひとと言『ガンバルゾ!!』東灘区御影在住。畠吉社長の御子息。



夏っぽさを演出

### ★Le 14 JUILLET '81 湯井一葉 パリ祭

■ 出発日／7月30日(木) 会員特別  
価格／9,800円 お申し込み  
先／ファッション・パーカトラベルサ  
ロン (078) 392-1735



湯井一葉さん

介された。UCCハイビスカスドリンク・サービスも人気を呼んでいた。また、セブ島レディス・スペシャル5日間の旅も企

★第2回 "もとまちアイドルレディー" 決定!

北野クラブ恒例の『湯井トラン』で食事後、1Fナイトクラブでショーヒーリングスが楽しめる。

■ 第1回ディナータイム PM 5:30  
・ 45 第2回ディナータイム PM 8:30  
・ 10 ショーハイム PM 9:45  
会費／1,600円 (コースディナードラムスワイン、ショーチャイジ、税サ込) テーブルのご予約はお早目に。係坂本

・ 16 第2回ディナータイム PM 6:30  
・ 45 ショーハイム PM 8:45  
会費／1,600円 (コースディナードラムスワイン、ショーチャイジ、税サ込) テーブルのご予約はお早目に。係坂本

## ポケツト ジャーナル



左より結城昌治、島田一男、山崎朋子、草柳大蔵、手塚治虫

季大学が今年も神戸市と神戸新聞社の共催で開かれる

★今年も一流講師を揃えて  
神戸夏季大学を開催

夏の恒例となつた神戸夏

季大学が今年も神戸市と神

戸夏季大学を開かれる

7月3日(金)手塚治虫(漫画家)

7月4日(土)島田一男(聖心女子

大学)「コミュニケーション論」

7月10日(金)結城昌治(作家)

7月8日(水)山崎朋子(女性史家)

7月9日(木)島田一男(聖心女子

大学)「コミュニケーション論」

7月10日(金)結城昌治(作家)

7月8日(水)山崎朋子(女性史家)

7月9日(木)島田一男(聖心女子

大学)「コミュニケーション論」

7月10日(金)結城昌治(作家)

7月8日(水)山崎朋子(女性史家)

7月9日(木)島田一男(聖心女子

大学)「コミュニケーション論」

7月10日(金)結城昌治(作家)

7月8日(水)山崎朋子(女性史家)

7月9日(木)島田一男(聖心女子

大学)「コミュニケーション論」

7月10日(金)結城昌治(作家)

7月8日(水)山崎朋子(女性史家)

時15分まで。申し込みは市内プレイガイドへ。(有料)  
★写真展「カンボジア―幼い難民とともに」開く  
タイ・カンボジア国境の難民キャンプで生活する子供たちの写真展が、4月29日~5月12日まで青少年会館5Fロビーで開かれた。

貧しい中にもたくましく生き抜く子どもたちの写真52点と絵が展示された。悲惨な体験を経て、ようやく届託のない笑顔を取り戻した子供たちの純粋な眼が印象的だった。



ミスハワイも参加

この講座も23回を迎えてすっかり定着し、各分野の一流講師の話が生で聞けるとあって楽しみに待ちうける人も多い。

化ホール中ホールで、時間は毎日午後6時15分から8時15分まで

これは55年2月、東京の保母さんらが中心になつて発足した「幼い難民を考え



こんなに屈託のない笑顔が

た。潮の香のただよう異人

ターナショナル(南泰吉社長)、神戸J.C.の共催で開かれた。

パティイが、神戸日米協会

会長(牛尾吉郎氏)、南イン

ternational(南泰吉社長)、

神戸市中央区御幸通八一六

号二五二一八一六一、内線三一六

五五一年二月、東京の保母さんらが中心になつて

発足した「幼い難民を考え

る会」(いいぎりゆき代表

が企画、全国を巡回してい

るもの。現在、全国に約800

人の会員があり、難民キヤ

ンプで幼児の保育やカンボ

ジア人の保母さんの養成な

どボランティア活動に携り

昨年12月には念願の保育セ

ンター「希望の家」も完成

同会では「同じアジア人

として子供の救援活動に手

をさしのべて下さい」とカ

ンパと会員加入を呼びかけ

ている。

問い合わせ/〒150 東京都渋谷区広尾

4-03-1499-11226

★「みんなと異人館でアロハ

ハワイの夕べ

7月9日(木)島田一男(聖心女子

大学)「コミュニケーション論」

7月10日(金)結城昌治(作家)

7月8日(水)山崎朋子(女性史家)

7月9日(木)島田一男(聖心女子

大学)「コミュニケーション論」



花時計



新谷さんに感謝

人の目を楽しませている。  
5月15、16日の両日には先  
着200名に粗品が贈られ、一  
周年が祝われた。

★今年もエライヤツチャ！  
力モ力連で踊りあかそう

阿波おどりの季節が近づくと尻のあたりがムズムズするという神戸っ子諸君へ

★北野天神で外人バザール  
若者の町北野で7月24日  
25日の両日に北野国際祭が

○円。第1回配本は六月下旬で  
「しんこ細工の猿や雉」「朝ごは  
んぬき?」を併録。第2回配本は  
7月下旬。港コ一への女性を描い  
た「ダンスと空想」が予定されて

★足立巻一氏の「夕暮れに苺を植えて」が、新潮社よりこのほど刊行されました。定価は一〇〇〇円。

てバザールをやつたり、音楽演奏、盆踊りと楽しい企画が面白おし。場所は北野天神の境内だ。

そして、その計画を拡大したものとして、六甲アイランドが着々と造成されつつある。これで神戸の街が海に広がり、都市部の幅ができた。

なぜか、次第に東漸する神戸のなかで、もう一度、歴史をふりかえり、そこから、また、新しい発想を得なければならぬのではないか。

神戸は港なしでは成立  
たない街だといえる。

歴史を大切にするとい  
うのは懐古的になるとい

そして、この神戸の港の原点は大輪田の泊であ

うことではない。  
奈良朝の頃からの天然

り、兵庫の津なのである。  
前号から兵庫をテーマ  
にした頁を設けた。

の良港であつた大輪田の  
泊の歴史や中世からの兵  
庫の町を探りながら、新

21世紀の未来都市をめざす神戸ではあるが、ま

新しい兵庫の姿を創造することも、未来都市神戸の

た、古い歴史も大切にしなければならない。

大きな課題だと思うのだがどうだろ。△Y△

どり行われます。  
川護さん。心  
いたします。

KOBE POST

★待望の「田辺聖子長篇全集」全18巻が文藝春秋より刊行されました。各巻に平行本2冊分を立てて、表紙布製箱入り/定価平均一八〇円。第1回配本は六月下旬で、「しんこ細工の猿や雉」(朝ごはんめき)が、新潮社よりこのほど刊行されました。定価は一〇〇〇円。姉妹誌月刊「オール関西」に約2年連載されていた作品で、休刊により中止、のちに文藝「六甲」に続稿連載されて稿了したという作品であります。装画は津高和一氏。★金子真珠の御影ガーデンシティ店長の山本誠造さんは五月より新しく福岡店の店長に着任。後任には、田河学さんが就任されました。★関西スポーツカーラブの、田中松山会長がこの程辞任され、後任に、山内謙長が就任されました。副会長は西川・吹吹次郎。中本正章(ハナガタ局長)・小林修治(テレ683西宮市甲子園口四丁目一二番二十三号)中田ビル二階。★女性初の市議会議員として活躍された中村千鶴子さんが、5月18日に亡くなられました。心よりご冥福をお祈りいたします。★中川衣裳店(セントラル街)の取扱店長・中川品子さんが亡くなられ、葬儀は東極寺で5月13日にとり行われました。喪主は孫の中川護さん。心よりご冥福をお祈りいたします。

スパゲティのルーツ

みなさん！スパゲティはもともとどこの食べものと思われますか？

「イタリアに決まってるじゃないの」とほとんどの皆様がお答えになるでしょうね。

ところが……意外や意外！実は中国で生まれたのです。

紀元前200～300年中国人は「ドウ」と言われる粉を棒状にして食べていました。

それがスパゲティの祖先(ルーツ)なのです。

その後蒙古軍の遠征によってヨーロッパにもたらされ、イタリア特産のデュラム小麦を材料として現在のスパゲティに生まれ変わりました。そしてスパゲティといえばイタリア、イタリアといえばスパゲティと言われる位、有名になったのです。

ですから、皆様がスパゲティはイタリアが本場と思われるのも無理はありません。

東京・渋谷 スパゲティ専門店



壁の穴

〈三宮店〉

中央区三宮町1-5サンロイヤル神戸10F(さんプラザ)

TEL 078-332-4551

営業時間11AM～9PM 第1・3月曜休

※7月2日京都店オープンいたします。四条河原町高島屋7F。京都におこしのせつは是非お立ち寄り下さい。

# 流れる素描

久保田 匡子 絵／田中 一好



△最終回

昨夜、次男は何度も台所に下りてきて、お茶を入れた  
り、お菓子をつまんだりして落着かなかつた。

「親父、本気で出て行つたの？」

次男はさり気なく切り出した。

「うらしいよ」

「馬鹿な親父だ。放つとけよ、すぐに帰つてくるから……」

と範子をいたわるように言つた。父に便乗しておし

「そう？」

疑わしそうに次男は見返した。だが寝不足を表わして

食べなかつた後ろめたさも感じているらしかつた。

「心配することはないよ。今に始まつたことじやない  
わ。これまで何回か、お父さんはあやつて気晴らしを  
したことがあるのよ。本当よ。そこで、せいせいした顔  
で戻つてくるんだから……」

慌しく態度をして出て行きかける次男に範子は話しか  
けて、本当に厭になつちやう、と軽口を叩く調子で嘆い  
てみせた。

腫れぼつたその瞼が、ぱっと明かるむのを彼女は見逃がさなかつた。

しばらくの間、範子は氣落ちがしてぼんやりと坐つてゐた。子供に言つたことは、案外、登の眞実を衝いてゐるのではないか。今日までの息の詰まる思いの重苦しい葛藤は、登のこの一片の紙が舞うに似た恣意の行動に手もなく組み込まれて、何ほどのこともないという気がしてくる。範子はかつてよく似た経験を味わつたことがあつた、と遠い過去をまさぐつていた。

弘子の家出だつた。弘子は実母が死んで一年もたたぬに、若い繼母を迎えた父に反抗して家出を試みた。弘子と知り合つた新入学年の夏休みだつた。一日で弘子は家に戻つた。それまで取りしきつた家事を繼母の手に委ねるのが無念だというが、家出を中止し理由だと言う。それよりも範子を驚かせたのは、夏休みでちようどよかつたわ、と弘子が何気なく言つた言葉だつた。登を年端もいかない弘子と並べる滑稽さを範子は覚えなかつた。登の家出を単なる外泊と考えたい気持ちがあつた。深刻な事態とは思つたがらない範子の心が、弘子に抱いた救われたような気軽な戸惑いを、そつくり現在に移し合わせていた。

これ以上傷ついたり、不安に苛まれるのはご免だつた。けれども、やはり登は放つておけば、嫌悪や、悲憤を内に増殖させて、自身の力では制御が出来なくなるのではないか。

範子は登の会社に電話をかけようとして、今日が土曜日だつたのに気がついた。隔週の土曜は休みなのだが、登は勝手に勤めたりして定まつていなかつた。もし誰もいない会社に一人だけ出勤している登に、朝から電話を入れれば、どんな返答が返つてくるかは手に取るようわかっている。昼まで待とう、その時に誰も出てこなければそれから考えよう——苦痛は出来るだけ一瞬のばしにしたい心理に似ていた。

通路のコンクリートを、姉が大量の水を流して洗つて

いた。その音を聞くともなしに聞いていた範子は、ふと、戦争中の町内で行なわれていた防火訓練を思い出した。

道路の真中に垂れ下がった仮装の席にめがけて、バケツの水を投げかける訓練で、防水桶から水をバケツ一杯に汲みとり、一気に離れた位置の席に叩きつける素早さ、的確さでは姉に適う者はいなかつた。姉は真白な足袋を惜し気もなく濡らして、バサツ、バサツと豪快な音を響かせながら、水を殆ど漏らさないで席に命中させていた。すぐさまとつて返して次の番を待つ動作も敏捷だつた。範子はそんな姉が何となく恥ずかしかつた。誰よりもむきになつてゐる姿に思わず目をそむけていた。

その頃と姉は少しも変わつていなかつた。毎朝、同じ場所を懸命になつて洗い淨めなければ済まぬ姉の姿は：「彼女は、アツ、と思つた。北山和男と会う約束と、彼の手紙の文面を同時に思い出したのだ。それと、登が弘子に言つていたという『律義で堅物の掃除好き』といふ自分の人物評を——

姉は自分に、いや自分は姉に酷似しているに違ひない姉だけではなく自分の実家そのものへ投げかけられた登の嫌悪や、憎しみの網にすっぽりとからめとられている自身の姿を範子は発見した。

戦争で家族を亡くし、絵画を捨てた登はそれだけに、再生の望みは強く深いものであつたことだらう。

範子の家族の中に自分の存在場所を求める登の希望を封じた姉のやり方ではあつた。

けれども常に実家の外側に置かれて疎外の思いに悩んできた範子の心は、既に実家から遠い所にあつた。彼女には登との家庭だけが自分の家庭であり家族であつた。それに反して、登には範子の一挙手一投足が、範子の実家との、それから又、姉との関連なしには受けとめられないのだろう……

範子は姉に向けられた登の忌避の感情の所在をまさぐり、絶望に打ちのめされた。

昼休みを待たずに、彼女は登の会社のダイヤルを回してみたが応答はなかった。空しいベルの音を断ち切るようにして受話器を置いた彼女は、空を擱むような不安定な感覚の中に揺れていた。

範子は鏡を前に一心に手を動かしていた。北山和男に会うことがさし迫った当面の仕事だった。二十六年前に自分のために盗みをした少年、緊迫した周囲の情勢などどこ吹く風で、大胆なハーモニカ演奏で自分を呼んだ少年に会いに行く準備をしている彼女は、少年に気を奪われて、頬に火傷を受けた少女の姿を鏡に映し出そうとしていた。範子は自分のものでないような強い動悸を胸に覚えた。

証券会社の社員専用通路に立って、範子は北山和男の出てくるのを待っていた。二人ほどがやっと通れる狭い殺風景な通路だった。肩を触れんばかりに密着して出入している社員に遠慮して、彼女は壁に寄つて小さくなっていた。彼はなかなか出てこなかつた。どういう人間に変容しているかわからぬ彼を、面を伏せて待つわけにはいかなかつた。出てくる中年の男の一人一人が北山和男に思えて、範子はしだいに疲れを覚えていた。さり気なく自分を観察して通り過ぎる男たちの視線を受けとめてやり過ごしている内に、出てくる時の浮き立つた感情は消え去つてしまつて、変わりようのない日常の業務に埋没している中年の主婦の現実感が、男たちの冷徹にさえ感じられる視線に促されて強く意識されてくる。家を出る時電話を入れると、裏門の入口にはいって待つてほしいと和男は言つた。安い変わらず忙しそうで事務的な口調はそつ気なくさえあつた。しかし、範子はむしろ彼が会う約束を覚えてくれていたことに、こみあげる喜びをかみしめていた。けれども今、醒めた気持になつて待つてはいるが、どうして裏門を指示したのか、客の多い証券会社であるから、表の店内で待つても一向に差し支えないだろうにという不審感が頭をもたげてくる。そ

の時、北山和男が出てきた。せかせかとして落ち着きなく辺りを見回す様子でわかつた。でなければ範子は彼だとすぐにはわからなかつただろう。

和男は範子のおよその変貌の予想を大きく外れていた。

「範子さんですね。北山です。お久しうござります」

両手をだらんと膝に落として挨拶する和男に、範子は言葉を失なつて深く頭を下げていた。

彼は靴の踵を引きずり、だらだらとした歩き方で範子の前を行つて、大柄な体躯が一層投げやりな態度を強く印象づけていた。

「いやあ、驚きましたね。範子さんはすっかり変わつてしまわれた。もちろん、あの頃はまだ大人になつていらぬ年頃だったんで当たり前でしようが。それにしても僕の知つた範子さんとは違う……」

喫茶店の戸口に近い席にむかい合つて坐るなり、和男は大仰に目を丸くしてまじまじと範子を見つめた。それから同じ意味の言葉をもう一度繰り返すと、くるりと後ろを振り返つて、

「コーヒーとケーキを二つずつ」

と二本の指を高くかざして注文した。その慌しく散漫な態度に範子の注意は注がれた。

「範子さんに最初に報告しておきますが、僕は現在これだけの資格を持った人間になつています」

和男は背広の内ポケットから名刺入れを取り出し、一枚を抜き取ると将棋でも差すような手つきでテーブルの上をすべらせて寄こした。範子が手にして眺めると、北山和男と普通の印刷文字が刷つた横に、司法書士、不動産鑑定士、経営コンサルタント、とあつた。

「お渡ししたのは個人用の名刺でして、僕の私的なつき合いの方に使つています」

せき込むように熱心に言う表情に、一瞬くりくりと活発に目を動かしていた少年の和男の顔が重なつたが、どことなく疲れ切つた全体の印象の中にすぐにそれはかす

んでしまった。

「今、税理士の資格を取るために頑張っています。なかなかつかしいのですがもうすぐ受かる予定です。その次はいよいよ公認会計士です。これはご存知でしょうか。大変な勉強が要求されましてね」

和男は得々とした様子を隠しもしない。

「そうですか。えらいのですね」

相槌をうちながら、落着かぬ違和感に範子は自然と目を伏させていた。

「僕は手紙で申し上げました通り、今の会社ではかなり重要な仕事を受け持たされています。ご存じとは思いますが業界ではトップクラスではありませんが、名は知られている会社でして……」

現在の地位を得るために、どれほど血の滲むような努力を重ねなければならないか。工場であなたと別れて以後、中学を卒業し、夜間大学で学び……  
彼はテーブルに体をのり出してまくし立てていた。範子の興味など度外視して、自己の経歴を異様なくらいの熱っぽさで、こと細かに報告している相手を、彼女はふしきな人物を見る思いで見やつた。仕方なく聞き入っている範子の耳に、彼女がまったくあざかり知らぬ男の生活が延々と語り続けられて行く。

「……そこで僕の一生を決定的なものにした恩師にめぐり会いました。△△先生は隠れた法曹界の権威で、僕はその家庭に出入りさせてもらえるほどの督励を受けましたか……。その先生が亡くなられた後は幸運にもまた別の先生によつて……。自宅もお蔭様で××丘に××坪もの広さのものを新築しまして……。家内とは見合結婚で彼女の実家は……。一男一女をもうけ、家内も自立した仕事を持ち……」

この人は何を言おうとしているのだろう、と範子はそ

のよく動く唇を呆然と見つめていた。

自慢とも弁解ともつかぬ和男の長広舌は、範子の耳をかすめて過ぎるだけのものになっていた。彼女には目の前の疲弊した中年の男の、切迫した息遣いのみがもの悲しく伝わってくるだけだった。

「やあ！」

喫茶店にはいつてきた二人連れに、和男は親しげに手を挙げて合図をした。男たちはチラツと範子の方へ視線を走らせ、当惑したような微笑を浮かべた。二人ともビジネスマンらしいきびきびとした物腰で、服装も折り目が立つて清潔である。彼らは席につくと一度和男の後姿を眺めやり、それからは見向きもしなくなった。範子は、和男には見えない位置にいる男たちの顔に、陰微な嘲笑が浮かぶのを認めた。

彼女は男たちの気配にも気づかず喋り続けている和男を痛ましく見守った。油気のない頭髪、老人のように

たるんで皺の目立つ顔の皮膚、血走つてきよときよとと  
焦点のない目をし、くたびれた背広を着た彼は同僚を誇  
示してみせることで、かえつてそのあやふやな立場を物  
語つてゐると思えた。範子は懸命に糊塗しようとしてい  
る和男を長くは見ていられなかつた。目を落とした時、  
コーヒーカップを置く彼の手首から薄汚れた下着の袖口  
がはみ出しているのが見えた。

彼はあまり幸福ではないのだろう……。彼としては豪  
勢な奢りに違ひないケーキを喉に押し込めながら、彼女  
はようやく我に返つてきていた。△わたしはあなたが想  
像されているよう立派な家庭の主婦ではないのです。

夫に逃げられたみじめな女なのです。範子は言つて話  
を打ち切りたかった。彼女は登を思つた。このような所  
で、得体の知れない男と会つてゐる場合ではないのだが  
た。いたたまれなくなつた範子は辞去するきつかけを待  
つた。

「本当に……。範子さんは僕の描いていた範子さんとは  
違う……。」

ため息をついて和男は蒸し返した。

「どんなわたくしだったらよかつたのです？」

殆ど一語も發していなかつた範子は、他に言葉もみつ  
からぬまま、別れぎわの挨拶のつもりで言つた。しかし  
、そんなことはどうでもよかつた。

「それは……。昔の範子さんは凛として、もつとすうつ  
とした……。白い作業衣を着ていられたせいかな、何だ  
か神々しいみたいで……。いや、笑わないので下さい。今  
の範子さんがいけないと言つてゐるのではなくて……。  
どう言つたらよいのかな。あまり派手になられて妖艶で  
……。」

口ごもつた和男は、改めて吟味するかのよう範子を  
眺め回した。化粧が濃過ぎると言つてゐるのは彼女にも  
わかつた。それと同時に彼が自分に落胆しているのもわ  
かっていた。

どちらからもなく席を立つた。じやア、と和男は会

積してくるりと背を向かた。範子は、懶そうに靴を引き  
ずつて去つて行くその後姿を少しの間見送つてゐた。

歩き出すとしばらくして笑いがこみ上げてきた。彼が  
自分の頬の火傷跡に気がついていないことが、奇  
妙なおかしみを誘つてゐた。あのうらぶれた貧相な男に  
軽蔑されるほどに、顔の化粧はすさまじく悪いもので  
あるに相違ない……。その時、一緒に外出したのに、横  
に並ぶのを避けるようにして、よそよそしく先を急いだ  
登の姿が、範子の脳裏を横切つて行つた。

範子の足は弘子の店の方角に向かつた。いま一度弘子  
に会つて確かめたかった。だが、何を確かめるのか範子  
にははつきりとわからなかつた。もしかしたら、登が弘  
子の所にいるかも知れないということの確認かも知れな  
かつた。彼女は弘子の部屋に敷かれた真紅の布団に、登  
が横になつてゐる姿をやさしく夢想した。

手前の辻でタクシーを降りた範子は、「コンゴー」の飾  
看板を目ざして駆け寄つた。扉に白い貼紙がしてある。  
「転宅のため閉店いたします。ごひいきに預かりました  
ことを、心より感謝申し上げます。」

間違つた店に來たのではないか、と範子は、「コンゴー」  
の看板と貼紙を何度も交互に見直した。貼紙には筆でく  
ねくねとしなつた文字が連なり、昔の弘子の筆跡がそ  
まま姿を現わしていた。範子の疲れた目に、北村和男の  
昔のままの筆跡が影のよう浮かび消えて行つた。

彼女は扉の前を離れた。行手には見覚えのない街の夕  
べのたたずまいが広がつてゐた。  
この街に登がいようとは思われなかつた。範子は  
化粧を払い落とすように、力を込めて頬をこすつてい  
た。確かにのは火傷の跡だけだという風に。

### 4F ヤマハピアノと楽譜・楽書

#### 世界のヤマハピアノ 全機種を一堂に展示

##### ●世界の検舞台にYAMAHA PIANO

日本で初めてヤマハがピアノを作ったのは1899年。ヤマハの技術者は、世界の検舞台で、数多くのアーチストに触れてきました。さまざまな国のさまざまなコンサートホールでアーチストたちは個性ゆたかに多彩なプログラムを組みました。そして、自分にとって理想的なピアノは何かを語ってくれました。彼らの言



限りない芸術の求めに応えるグランドピアノの代表（フルコンサートグランドピアノCF）

葉は感性にあふれ、抽象的です。ヤマハはその言葉のひとつひとつを解明し、研究し、そのすべてをピアノの音に反映させる努力を続けています。

##### ●ヤマハピアノを全機種展示

アップライトもグランドも、ヤマハピアノの全機種を展示。ゆったりとしたフロアで見比べ、弾き比べて、あなたにふさわしい一台をお選びいただけます。「お客様相談コーナー」では、ヤマハの経験豊かなスタッ

フが、ピアノの選び方、レッスン方法、防音など、ピアノに関するあらゆるご相談を承っています。

##### ●グランドピアノの代表 CFサロン

ピアノがずらりと並んだフロアの片隅に、ガラス張りの小さな部屋。中にはヤマハフルコンサートグランドピアノ CF が。この CF を試弾できる落ち着いた雰囲気の小部屋が CF サロンです。巨匠リヒテルをはじめ、世界のトップピアニストたちが絶賛した CF の豊かな音色を、心ゆくまでお楽しみください。

##### ●パイプオルガンの莊厳な音

驚きのピアノコーダーも重厚な響きをもつパイプオルガン（カナダ・カサバン社製）も展示しています。ピアノとはまた違う莊厳な音色を確かめてください。またテープでピアノが自動的に演奏されるピアノコーダーも。スコット・ジョブリンのラグタイムピアノやウラディミール・ホロヴィッツの「カルメン変奏曲」を聞けば一台欲しくなるかも。

#### 豊かな音楽の世界 楽譜・楽書を充実

##### ●輸入楽譜も充実、豊富な品揃え

クラシック、ポップス、ジャズ……多様に拡がる音楽の世界にあわせて、お客様のご要望に十分おこたえできるよう、楽譜と楽書の売場は、一段と選びやすく、買いや

格調のCFサロン、ヤマハピアノを全機種展示、パイプオルガンや自動ピアノも。そして楽譜・楽書も4Fに。



豊富な品揃えの楽譜・楽書売場

い売場に変身しました。ピアノ曲、スコアなどの輸入楽譜もさらに充実し、世界各地からの楽譜の取り寄せもスピーディな入荷で専門家にも喜ばれています。

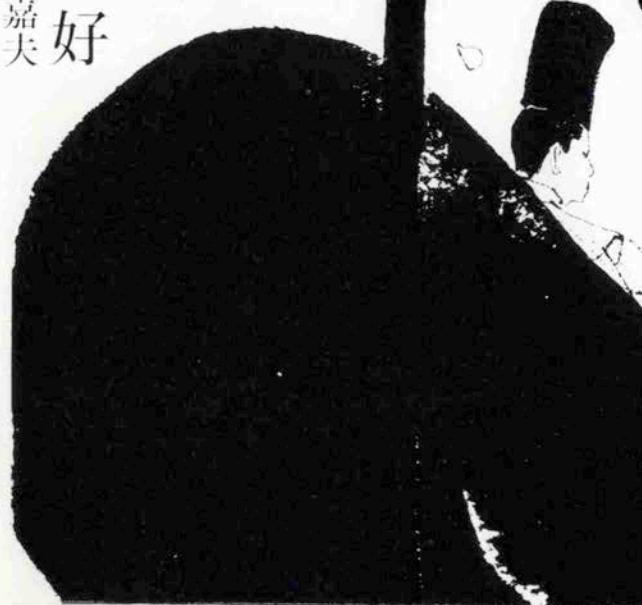
#### KOBE YAMAHA

6 F	ヤマハホール	078-391-7652
5 F	エレクトーン	078-391-7655
4 F	ピアノ 楽譜・楽書	078-391-7654
3 F	管弦打楽器	078-391-7653
2 F	LM楽器 ヤマハスタジオ	078-391-7652
1 F	レコード・プレイガイド オーディオ	078-391-7651

連載小説 第一回

福

秋吉  
絵／岡田  
嘉夫



少し寒いほど青灰色の夜空に、清らかに澄みわたつた月が高くのぼり、寝殿の影が黒く南庭に落ちていた。灯火がなくとも、月光がみなぎりあふれた池に張り出しだ松の枝ぶりや中の島のたたずまいが、隅々まで明るい。梅の甘い香りが芬々と庭前に満ちている。定家は南廊の欄干に凭れて皓く輝やく前裁をながめていた。星形は、みな寝静まって、深閑としている。部をおろした中から、ときどき咳きが聞こえてきた。しばらく会つていいな女のもとへ歌を送つたり、夜遅くまで盛んに咲いてる梅花を楽しんだ余韻にはちがいなかつたが、寝所に入つてからも、自分でもふしきにおもうほど感情が昂ぶり、光明の光さえちらついて、いつまでもねられなかつた。朝から熱っぽくて咳が出了。病弱のために無理はできないけれど、それにもまして、美しい時間のすぎていくのを一瞬でも惜しむ気持がつよかつた。こうして皎々と照る月に對してはいるだけで、身をふるわせるほどに遺憾ない思いが湧きあがつてくる。それが何であるのか彼にはわからなかつたが、ただ月も梅花も今宵かぎりのものだという思いがある。なるほど自然はくりかえす。しかし、それをみている定家の十九才の春は返らない。

定家は階を下りた。白河の砂を敷き詰めた南庭を横切つて、池のほとりに行く。水面は鏡のように空を映して鎮まっている。彼が月光に蒼然とした夜を愛するのは、それが死の世界に近いからだつた。治承元年侍従になつた十四才のときから、二度も大病をわざらつて、死の淵をさまよつた。そのとき、彼がそこに見たものは孤独地獄だつた。自分が死んでも世の中は何も変わりはしない。そんな影ほどのたしかさもないのが人間だった。

定家は池をめぐつて小橋をわたつた。月は寝殿の真上にあつた。その近くに金色の小さな星がひとつだけ出てゐる。間にまぎれた片雲がところどころに浮かんでいる。こうして夜空を見上げていると、自分がこの世にいないような錯覚をおぼえる。天地の間に身の置き場所がない。人が寝所に押し込められて眠りをむさぼるように、皓月に照らされ庭を徘徊する人も、また深い月の影でしかない。

「牢固常住でないのが、この世のならいでしよう。それをいくら嘆いていても、今を生きる意味とはなりませんよ」

定家の耳元で、左馬頭行盛の明るい声が聞こえた。彼は武人らしい断固とした態度で、そう言つて笑つた。行盛のくもりない目差しは、ちょうどこの月のよう透明だつた。

「私も、いたずらに、なげいているばかりではあります。あなたの剣が、私にとっては、この三十一文字の和歌なのです」

定家はそう応えた。行盛は、そのとき、初めて威丈高な仮面をつけて、燃えるような真剣な顔で、定家を見た。彼はそこに共に流れる熱いものを感じた。

定家が最初に行盛と会つたのは、先の鹿ヶ谷の変で、父右京大夫入道俊成が、誣議を受けたときであつた。御子左家は和歌の家筋で政治とは無関係であつたが、主謀者の一人大納言成親は、定家の異腹の姉の夫でもあり、それに連坐した弟左少将盛親は、同腹の姉八条院三条の夫であつた。定家は入道のそばに控えていた。誣議は形通りのものだつた。疑惑のあるわけがない。三位大進輔がなくなつて、入道が歌合の判を多くつとめるようになると、六条家の敵意は露骨なものになつた。弛まない研鑽をつんざく入道に勝てないとわかつて、權謀術数を弄することもありえた。定家より少し年長の行盛はそのことをよく理解していた。

「人がどれほど悪く言つても、事実を知りさえすれば、すべてがわかります。われわれにしても、陰で悪様にのいる人が多いが、そんな人は、一度、福原に来られた

らよいのです。火災、強盗、大衆の兵乱が絶えない都にくらべ、福原の京がどれほど立派であるとか。法皇は何度も行幸されているから、あなた方も御存知でしょう。

入道大相国のおられる雪の御所は、六波羅や西八条にもまして、広大です。大輪田泊には唐船が入港し、宋人が大路を歩いています。われわれにとつては、福原こそ宋にも誇りうる都なのです」

詮議が終つて、雑談の中で、行盛は自信を持つて断言した。美貌きこえる権亮少将維盛とよく似た優しい顔立ちだったが、話しぶりは荒々しかつた。定家はそれに不吉なものを感じた。彼の周囲の人間にはない妖しさがあつた。修理大夫経盛をはじめとして、平氏にも歌を上手に詠む人は多くいたが、彼にはそんな心があるとも思えなかつた。

ところが、その後、何かと使いをよこし、歌を送つてくるようになつた。そしてその胸底に、深い虚無を抱く人であることがわかつた。わずか二才で父をなくし、その後の年月は、相国入道の命令で、一門に立ち向う敵と闘つてきた。それは東国にいる左兵衛佐頼朝をはじめとする源氏だけではない。園城寺や南都の大衆、それに、四百年のあいだ葛のようになに根を張つた貴族、さらには、院でさえ例外ではなかつた。行盛は敵と闘う中で世の無常を乗り越えていた。それが平氏の公達の覚悟と自信であつた。しかし、それは定家とて変わりはない。彼もまた、六条家と闘つて、御子左家を盛り立てなければならぬ。和歌を詠むとは、とりも直さず、無常に立ち向うものであつた。

定家は、夜目にもあざやかに練乱と咲く梅花にさそわれて、中の島から梅林に向つた。

中門廊の先に形ばかりの釣殿があつて、池はその手前までしかなく、続きに梅林があつた。遠くからながめていると、波の滴か月の光のようにきらめいている。激しい熱情を内にひめて鎮まる女のようで、白夜の中でいきづいているのは、ただこの花ばかりであつた。その風情

も、陽光の下よりも、却つて、月光の中がまさつてゐる。

定家は梅花に女の面影をさぐつた。法皇と入道相国の間に軋轢が目立つようになつて、他の平氏の女と同様、その人の立場も微妙になつてゐた。さらに、昨年十一月、人道相国が数千の騎馬をつらねて福原より上洛し、法皇を鳥羽殿に遷されてからは、いつそう辛い思いをされてゐることだらう。むろん、それは年若い彼には十分になぐさめることの出来ないものであつたが、悪いと思ひながらも、やはり、いつとはなしに、足が遠退くようになつた。そしてそれだけに、定家の心中で女を求める気持がはげしく燃えていた。表に出れば、たちまち行盛やその他の公達に知られ、いつかは夫である人にもわかつてしまふような間柄だけに、歯痒くてならなかつたけれど、これではこのまま立ち消えになつてしまふことだらう。苦しさがつるばかりだが、自分の姉たちを見ていても、それで仕方がないのかも知れない。二世のちぎりなどと言つても、現実には憐い振りの関係でしかない。だからこそ、よけいに、女があわでならなかつた。

定家の狩衣の袖にひとひらの花弁がふりかかつた。風が少し強まって、空に低く薄雲がながめている。彼はそれをつまんで口にふくんだ。異常な心の昂ぶりの原因が、女に会わぬことにあるのかも知れないと、定家はふと思つた。

どれくらいのあいだ、梅林を徘徊していたものか、自分でわからぬ。亭で休んでいても、いつたん浮かんだ思いは、容易に消えなかつた。自分に危険をおかしてでも、女のもとへ通う勇気がないだけに、無気力にさいなまれ、苛立たしくてならなかつた。義兄中務少輔定長が出家した現在、御子左家を継ぐものは、定家をおいて他にはいなかつた。それすら棄てよと、いくら心の中で叫んでも、さすがに行動にはならなかつた。

生あつたかい風に白い花弁が舞つた。きな臭い匂いが

した。それが縹渺とした梅の香りを追いやった。屋形の方を見ると、西の渡殿の空が明るかつた。月光に照らされた色ではなくて、仄かに檜皮の縁が赤味をおびていた。そう思つて周囲をながめると、さらに薄雲が半ばをおおつていた。何かの異変を告げるよう、犬がけたまし



く吠えている。突然の変化だった。家人も起き出した。軒廊の奥に、明りがともっている。たつたそれだけのことで、永遠を籠めたような静謐な夜が消えてしまった。定家にはそれが少し残念な気がした。

薄雲はたちまち厚くなってきた。雲間から顔をのぞか

していた月もいつかそれに隠れてしまつた。色褪せた弱々しい月明りの中で、竜が空を駆けるように、黒い煙が湧いてきた。それは濃紺の夜闇とはつきり分たれている。火事だった。それもすぐ近くだった。黒い煙は風になびいて、大屋根の上を低くながれ、屋形を覆わんとする勢いだった。そのあちこちで細かい赤光がはぜた。

築地の外を車馬があわただしく通る。人が声高に話している。火勢は北西からこちらに向つていた。

黒い煙は頭上高く流れいく。

様子を見に出ていた家人がもどつて来たらしい。中門廊から寝殿の南廊をかけて行く。定家の寝所にも告げにきたことだろう。そして、彼がいないのに気づいて、庭を捲しに来るだろう。夜更けまで外を徘徊する彼の性癖も、このごろでは、物好きなど非難めいたことも言われなくなり、家中のものが誰でも知つてゐる。さすがに母は心配してくれたが、入道は、自分にも若いころ同じようなことがあつたのか、最初から別段なにも言わなかつた。

須臾の間に、西の空がはつきり

と、不吉な紅色に染まってきた。火事に気がついてから、半刻もたっていなかった。月影は絶えて、あいたいとした露が、四辺にただよい、黒雲は夜空を覆つた。

案の上、内記が中門廊から庭に出てきた。梅林の中に立つて、定家をみつけて、そばへ走つて来た。

「大火事でござりますよ。車の準備ができましたので、おいで下さい。裏の左少将実教様の屋形にも、火が移つた由でございます。すぐに、こちらの方も、火がまわつてくるのに、ちがいありません」

しかし、定家はそれに肯じなかつた。火事だとわかつたときに、それを見ていたいという気持を押えることができなかつた。

「私は、もう少しここにいるから、先に車を出してく。火が飛んでくるといつても、今すぐに燃えるわけでもあるまい」

恒河の沙の数ほどの無量の火の粉が天空をながれるようになつた。それが頭上にふりそそいだ。定家のところにも煙がせまつてきた。彼はそれでも動かなかつた。書庫におさめられた夥しい文書のことが脳裏をかすめる。先祖から伝来したものや、入道が必死のおもいで蒐集されたものなど、彼もわざかに読んだばかりで、多くは未見の貴重なものであつた。

寝殿の大屋根の下には、すでに火が入り込んでいる。軒先から、蛇の舌のよう、なめらかな紅蓮が出てゐる。白煙につつまれた屋形のあちらこちらで火の手があがる。ゆるやかに傾斜した檜皮の表面からも火が燃え出した。

定家が生まれてこの方、火事は日常沙飯のことだった。治承元年の大火では、桶口富小路より火が出て、大内裏をはじめとして、有名な御殿が次々と炎上し、またたく間に、都の三分の一を焼失した。保元二年に建てられた太極殿は、わずか二十年あまりで、故少納言入道信西の野望と共に、灰燼に帰した。地獄の火の車のように、都の空を縦横に、焰が駆けめぐつた。日吉山王の使いの猿が、手に手に松明を持って、比叡山から下りてきて、火

を放つたという噂が飛んだ。京洛は、往生要集ながらの、炎熱地獄の巷と化した。阿鼻叫喚の無間奈落だつた。定家は、憑かれたように、次々と猛火におそわれていく街をさまよつた。逃げまどう人々も、車馬も、人家も、屋形も、ことごとが赤く炎にそまつて、末世の劫火に焼き尽された。彼が病を得たのはそれからほどなくしてだつた。

寝殿が燃えていた。定家が生まれ育つた五条の屋形が、彼の目前で、音を立てて燃えている。夥しい火の粉が吹きあがる。飛火は梅林にもやつて來た。目もあけていられないほどの煙が押し寄せてくる。激しく咳込んで止まらない。定家は、苦しそうに胸元をおさえながら、なお炎上する屋形を見ていた。

「燃えるなら、燃えよ」と、呪咀にも近く、心中で叫んだ。

屋形も、御子左家も、京師も、何もかも燃えてしまえばよい。それは、四百年の歴史を焼き尽くす恩寵にも等しい。すべての係わりを、自らの手で絶てない自分にとって、火炎は定家の意志ですらあつた。いったん滅びの際に立つた定家にとって、もはや、何ものも恐れるものはない。自分はこの炎熱地獄から何かを学びとることだろ。それは、妖艶な滅び行くものの断末間の絶叫にも似て、かららずや、人の心を根底からくつがえすものである。それを教えたのは、左馬頭行盛をはじめとする平氏の公達だつた。定家は、天をこがす劫火の中に、行盛と、彼の一門のあの女を見た。

「新しいものは、古いものの瓦礫の上にこそ生まれるのです。そして、いったん生まれると、古いものを、徹底的に、駆逐しないでは、止みません」

定家がもたれている梅の木も、白い煙をあげて燻り出した。いまにも気を失つてしまいそうなのに、彼の心は炎上する屋形の火を映して激しく燃えていた。

